

G-6 多賀城市八幡地区

2012年1月16日(月)

報告者名	菊地 暁	被調査者生年	1970年(男)
調査者名	菊地 暁	被調査者属性	八幡地区出身・在住、職業は神主、農業、不動産業
補助調査者	赤尾 智宏		

話者情報

話者は昭和45年、八幡の沖区で生まれた。話者の家も所属している宮内契約には同姓の家が3家ある。話者の家は、本家から分家した家から、さらに分家した家である。屋号についてはわからない。本家と同じ宝国寺の御門徒(檀家)になる。葬儀などでは、ホンケサマから上座となる。葬儀以外に盆、正月に本家に拝みに行くことはない。話者の家は天童家の家臣ではない。

八幡には、江戸時代以前は神主が30人いた。普段は農家をしており、祭のときに神役を勤める。次第に神主が減り、江戸時代には10人ほどになった。神主は仙台市の中野など、各地に住んでいた。末の松山の下にいた高橋家もその一つだったが、跡継ぎがいなくなり、土地の切り売りをして、平成になり絶家した。

話者家は代々神主ではなかったが、明治頃、話者の曾祖父の兄が神主になるよう依頼を受け、話者の曾祖父も神主を務めることになった。曾祖父は、舟大工と畑仕事で生計を立て、例祭のときのみ神主の仕事をした。

話者の祖父も神主だった。祖父の時代は、家には何世代も一緒に住んでおり、結婚した兄弟も同居していた。財産がなく、分家することが出来なかった。

話者の父は浮島出身で、話者の家の婿養子となった。農業に従事し、神職にはつかなかった。話者が生まれる前、社務所で養蚕をしたことがあったが、それが原因で社務所が火事になり全焼してしまった。

話者は、宮城県内の高校を卒業後、塩釜神社で2年間寝泊まりし、神職に就く修行をした。20歳で神職の資格を取り、千葉県千葉市の神社に奉職、埋立地にIBMなどの工場が建ち始める次期で、地鎮祭をよく務めた。2年後塩釜神社と八幡神社を兼務する。現在は八幡神社と浮島神社を管理している。話者で神主は3代目。八幡の人は、話者のことを「神主さん」、「宮司さん」、「ハウインサン(法印さん)」などと呼ぶ。もともと仙台市宮城野区も氏子地域だったが、現在は仙台側の神主に任せている。

話者は、現在でも畑仕事をしているが、田は4年前からトラクターを所有している専業農家に任せている。今年は津波で塩水を被ったので、稲作は出来ない。八幡の農家は地主が多く、不動産をやっている。農地をテナントやアパートの用地としており、話者も土地を貸している。

話者の被災状況

話者は八幡神社で留守をしているときに被災、家族は自宅で被災した。津波が押し寄せてきた

とき、ゴォー、バリバリと音がして、はじめは大きな雷が鳴っていると思っていた。外に出て仙台港の方へ目をやると、流れていく何台もの車が見えて、津波が押し寄せてきていることに気づいた。本殿が拝殿より高い造りになっており、本殿の木製の扉が津波を防ぐ役割を果たしたため、話者は助かった。津波が弱まったときに、水圧によって扉が破られ、ゴミが入ってきた。

自宅、蔵ともに1 m以上の津波に浸水し、自宅の1階は泥だらけになり、2階で生活した。漏電調査で1週間ほど停電し、水もなく、風呂もトイレも使用できなかった。神社の整理のため、話者一人が自宅に残り、家族は親戚の家へと身を寄せた。話者は4ヶ月間、日中は神社の整理をし、夜自宅に戻るという生活だった。

八幡神社

平安時代は末の松山の高台、現在浄水場がある場所にあった。浄水場には、江口家が守っている祠がある。鎌倉時代に城を建てるために現在地に移った。宮城郡内に3社ある郷社の1社で、あたりでは社格の高い神社である。

八幡神社の被災状況

社務所が全壊し、神社関係資料、パソコン等、神輿、はっぴなどが流出した。倒木により鞘堂も倒壊、保管していた子ども神輿も壊れた。また、神社周辺の杉が津波で浸水し、塩害によって倒れる前に全て伐採することになった。

氏子からの寄付金によってトイレ、手水、鳥居は修復し、他にも11月には神輿を保管する鞘堂を立て直した。しかし、社務所は数千万円の費用がかかるため、予算の目途が立っていない。

八幡神社が、防災公営住宅の建設といった市の復興計画区域内にあるため、市役所と共同で進めなくてはならない。区画整理が行われる予定で、神社の土地は減るが、参道の整理ができるだろうと話者は考えている。

八幡神社の氏子

砂押川より南側の地域、西は八幡、桜木、東は栄まで多賀城の約4分の1が八幡神社の氏子地域となっている。氏子地域の全てが浸水したが、末の松山のみ高台で津波の被害がなかった。かつての宮城郡、現在の仙台市中野まで氏子の区域であったが、戦後に現在の多賀城市内のみの氏子区域となった。

八幡神社周辺は工場地帯で、八幡、桜木が居住地域である。八幡には、工業化以前から住んでいる家があり、もともと氏子であった。留ヶ谷、笠神、大代など各村があったが、その中でも最も大きかった八幡（やわた）村が八幡神社の氏子だった。桜木は、仙台新港建設により集団移転してきた人、自衛隊関係の移住者が住んでおり、八幡神社の氏子ではなく崇敬者である。

八幡の4部落、八幡上一、八幡下一、八幡下二、沖から、それぞれ2名ずつ8名が氏子総代に選ばれる。その中の3名が責任役員となる。責任役員には、財産のある人が年功で選ばれる。総代は神社の祭の運営、年間運営費・祭典費を部落から毎年集めるのが仕事である。氏子1軒あたりからもらう金額は、氏子の気持ちに任せており、定額はない。

神主の仕事

年末に1軒ずつ、大黒様、オカマサマと書かれたお札、ご神像を配る。八幡だけで約300軒、昨年は200軒ほどの家を廻った。全ての人が神棚を祀っている訳ではないので、お札が必要ないという人には、手ぬぐい、おしぼりの袋を渡す。渡すものは毎年変わる。日中仕事で留守の家は、自らお札を買いに来る家もある。お札を配るのは八幡のみで、桜木は区長に任せている。

神主としての仕事として、他にお祓い、地鎮祭、新年の安全祈願などがある。

今年は工場などが津波の被害にあったため、神社で行う会社関係のお祓いが減った。年末年始の収入の8割であり、それ以外では、地鎮祭、新築、今までお世話になった人の家の解体の際にお祓いなどがある。お祓いをするのは古くから住んでいるA氏の農家であり、工業地帯の桜木には行かない。

八幡神社の年中行事

年始には、以前は1月1日に元旦祭があったが、氏子、崇敬者が忙しかったため、1月3日に新年祭へと変わった。新年祭には、氏子総代、八幡・桜木の区長、部落の代表など肩書きのある人が集まり、お祓いを受け、玉串を奉納する。

1月14日にはどんと祭、4月の第2日曜日に八幡神社の例大祭がある。春の例大祭では豊作を願う。八幡神社の例大祭の歴史は古く、平安時代に馬場通りで流鏝馬が行われていた。天童家が移住してから、天童家の主宰により神社前通りで行われるようになった。

かつての例大祭は、例祭は神輿もなく、ご祈祷をして終わりだった。しかし、昭和60年になってから、総代達が刑務所から子ども神輿を100万で購入した。大人神輿は数百万する。八幡は駅前通、町通り、馬場通りを2つの神輿が廻る。桜木地区には、部落別に神輿が4つある。例大祭では、各部落が神輿を八幡神社まで担いで運び、お祓いを受けた後、部落に戻す。

通常11月23日に新嘗祭があるが、浮島神社の祭日と重なったため、25日に行った。新穀感謝祭であり、ご祈祷をし、社務所で直会がある。農業関係の代表である実行組合長4名、氏子総代も参加する。直会の準備は女性部が担当。昨年は何もなかった。

今年の正月、どんと祭、新年祭は行うことができた。神輿が壊れ、はっぴなどの道具もそろっていない。さらに、祭典費を集めなくてはいけないが、それも難しいため、例大祭の開催は厳しい。

八幡地区の諸家

八幡上にある江口家、郷古家などが、天童家移住以前からある古い家である。

天童家の契約は最近まで続いていた。婿養子を迎え、天童家の血筋は途絶えてしまい、「頼久」など名前に「頼」の字をつけることもなくなった。天童家の屋敷を囲んである馬場家や草刈家が、家来の家である。

中谷地の大場家は、鬼首から中谷地に住み着いた。

喜太郎神社

天童家は、喜太郎神社を祀っている。11月の第1日曜に秋祭があり、話者が神事を執り行う。

祭日は、天童家の人の都合によって変わる。普段管理している人をベツトウサンといい、今は大工のB氏が管理している。ベツトウサンの他に、喜太郎神社周辺に住んでいる天童家の関係者などが祭に参加する。天童家は八幡神社の氏子でもある。江戸時代に天童家が作成した地図にある末の松山八幡宮とは、今の喜太郎神社のことである。かつて、喜太郎神社の社の中に八幡神社を祀っていたことがあり、喜太郎神社のお社には扉が2つあり、1つは喜太郎神社、もう1つは八幡神社のものだった。また、喜太郎神社の近くに光徳院という寺があったが、現在は駐車場になっている。

萩原神社

萩原神社は、中谷地契約講の氏神様である。中谷内契約の依頼で、八幡神社の境内に萩原神社を祀っていた。9月9日が祭日だったが、現在は9月の第1日曜日となっている。大昔は、中谷地契約による鹿踊が奉納された。津波で萩原神社は流出したが、去年も神社跡にご神体を置いて、祭壇を組み、例祭を行った。C宅にご神体がある。

ゴマダ稲荷神社

ゴマダ（護摩壇）稲荷神社は、原契約講の氏神様である。疫病が流行ったとき、護摩壇を焚き、疫病が鎮まるように祈った。ゴマダサマは原契約講の家の山や畑など、あちこちの敷地を廻っていた。今はD宅に祀ってある。年に1度、11月の初めに祭があり、D氏と話者が立ち会う。

蛇王権現

蛇王権現は蛇の神様であり、八幡神社境内の南西に祀ってあり、ガス屋のE商店・E氏の家の神様である。E氏の家には、オガミヤサンをしていた人がいて、屋号はカミサマである。昨年の津波で石のご神体が流れてしまった。その後、自宅の敷地内でお祀りしている。祭日は、旧暦の10月26日、11月の下旬に話者が拜んでいる。

宮内契約講

宮内契約は、葬儀の際、穴掘り、ちょうちんの準備などの手伝いなどをした。震災で宮内契約



写真 蛇王権現

の仙台新港に住んでいた人は家ごと流されて、亡くなった。そのときは、葬儀のほとんどを葬儀屋に任せており、葬儀の受付をやる程度で、話者も担当した。宮内契約は現在でも続いている。契約3班からなり、それぞれの班を契約兄弟と呼ぶ。各班がそれぞれの班の葬儀を手伝うが、人手が足りないときは他の班から助けてもらう。契約全体のまとめ人を講長といい、年長者が選ばれる。現在は、講長が取り仕切る。戸数が20から12に減っ

たので、班はあってないようなもの。

八幡の檀那寺

宮内では、正楽寺（仙台寺町・新寺小路）、鍋沼の専能寺など檀家となる寺は家毎に異なる。話者の家の墓は宝国寺にある。葬儀は神式だが、墓参りは仏式。話者の家も宝国寺の御門徒（檀家）である。